

べんとうについて、ふの話から

神戸、島建設には行かないように

神戸の須磨、白川峠の向うにある島建設という人夫出しのヒデ工はなほ、そこからは作ったばかりのともだちに聞いてすぐ、オニギリヤの伝言板に書いておいた。

伝言板はほとんど役に立たなくなっているけれど、そこで、そうなったのはオニギリヤの商売の仕方の問題なんだけれど、抜かしてはならないその問題をいまは抜きにさせてもらって、書いておけば少しは役に立つこともあるうち、うつせで伝わるだけでもいいと思ったし、自分のところ覚えのためにもなるから書いたのだ。

そこであらためて島建設のはなほはなほそこそこにくれりは、三十過ぎて士族

になり、やがてトビの仕事もきっちりおぼえて経験十分な男。いま四十六歳という。

Sという役が、六月半ば、トビの仕事が少なくてヘギャンフルで大きく買けたこともあって一人夫出の承知で島建設へ行った。契約は実際十五日、それを十二日で精算して帰ってきた。五千五百円で飯代八百円が行くときの約束だった。

どのくらいヒデ工ものだったか。

十五日契約を十二日で精算はしたが、明細書がまったくない。Sは手帖に毎日のことを書いているので、それと明細書をつきあわせれば、諸式のこともしっかりわかるはずなのに何もなし。

そのくせ、自動車代というのが五千円差引
かれていた。これはナンダ？ ときくと、釜
から飯場までのタクシー代という答え。

ジョウダンじやねえや！
タクシー代は親方持ちか手配師持ちか、ど
っちにしても土着、人夫から取るのは筋が
いだとらは文句をつけはめめたのだが、どう
にも立場が弱かった。

というのは、その日、三人いっしょにだめ
ることになって、ほかの二人はもうカネを受
けてしまいいへ文句を言わずに、帰るた
めのタクシーを飯場の前に待たせてあり、さ
ちゃん早う行こうぜと呼んでいろのだ。
ケタツソ異いけどそのままにして帰ってき
ちまったよ、とらはにがわらいした。

結局、その手帳では四万ナニガシの手取り
があるはずのところ、二万六千円とかだった
ので、そのなかでもハラが立つのは、八百円
と手配師はきっていた飯代が千円引かれてい
たことだとうだ。

その上、弁当は十二日間を通じて塩サバ一
点張り、米は最低だし、食べたシロモノは
なく、実際食ったことはないという。

食わないべんとう

弁当を食わなくてどうやって仕事したか。
これは当然の疑問だからきいてみた。
私たちは毎日、西宮のヒコーム管入れの現
場ではたらいでいたという。

答えはカンタン。

その現場の親方が、急建設の弁当のヒデ工
のは十分みとめていて、おんまりヒデ工から
その弁当は棄てさせて、毎日自腹で私たち
屋敷を食わしてくれたのだ。

いい親方にはちがいない。

もうケがそんなに大きいということは無論
あるにしても、だ。

こっちにも思い出すことがあった。

いまは人夫出をせめてしまった川西の金
徳建設というところ、センター正面にいまそ

バスをとめる江川組のともだちの若いのがい
つも運転してきていた。

ここの井当はそのころ有名だったから知っ
ている人は知ってるだろう。

一人当り、ちっちゃなニギリメシ三個。塩
も振ってない、ラメボシなんかもちろん入っ
てない。オカズは目ざし三匹とタフアン。

これを一人づつに包んでおくれない。

あっちへ三人こっちへ五人という具合に売
り渡される人数ごとに、三人ならニギリメシ
三個、五人なら十五個とオカズも、イチゴの
箱やらレタスの箱やら、あり合せの段ボール
へいっしょに入れてよこす。

その箱がまた大へんなシロモノで、金徳建
設は別に寄せ屋もやっていたから、そっちへ
集ってくる箱を使ってもらいとみんなうっ
わけていた。

とにかく、現場へついてそのへん適当なと
ころに段ボール箱を置いて、仕事してヒルに

帰ってみると、そばに犬が寝そべっている。

ありやあ、めくを食いやがったなー

とは誰でも一度は考えろが、実はこれが大
マチガイ。犬は全然見向きもくなかったらこ
くて、ニギリメシも目ざし無事なのだ。

つまり、ほんとうに犬も食わない程度の弁
当というのが金徳建設の名物だった。

それでも行く者がいたへおれも行ったか
は、弁当以外にどこかいいたところがあったか
らだが、いまは弁当のはなくだけしよう。

金徳建設から人夫を取っているのに重宝運
設というのがあった。建築ばかりの仕事だ。

この重宝のオヤジが、丁度その行った西宮
の管入れの親方と同じで、そんなモノは食で
なくていい、食えるなら十時のオヤツにしろ
と全徳のニギリメシのヒデ工のをよく認めて
いた。

そして屋には、現場近くの食堂で好きなも
の食えというわけ。

仕事は目一杯だったけれど、その分はまた現金で、金持さんとは関係なく——と帰りぎわには気を利かしてくれて、こかもそわがオヤマリだからおれは重宝からニンゲンの注文がきてるかどうかが、たしかめてからバスへ乗ったくらいだ。

Sの話をきいてるうちに、ふっとこんなことを思い出した。

毎朝軍歌の流る飯場

Sの話のつづき。

島建設の起床は六時半、ベルが鳴る。

五十人からいたというから相当に大きな飯場なんだが、短期契約のSたちが入れられたのは、マトモに立てない屋根裏の、窓もろくもつばない部屋。

そこから降りて食堂でまづいれを食う。と、スピーカーが鳴って、なんと流れてくるのは音響一枚にあげた軍歌のテーマ。

たまーたもんじやねえ、アタマの上で朝が

ら軍歌がどやんのせんなんて——

Sはそう言った。

そして、やめてくれと島建設のオヤジにさっそく文句をつける、いざこれはみんなの士気を高めるためにかけとるんや——という返事で、少しボリウムは下げたが、決してやめはしなかつたという。

なにやらパチンコ屋的であり、軍歌道場ふうでもあり、出征兵士が送られるようでもあり、ともかく、飯場の朝の風景としては初耳のことだ。

ひとごととして、多少ユーモラスでないこともないが、もし自分がと思うと、やっぱりSと同じでやめてくれと言うにきまつてる。

神戸、島建設。

元来は向うの新開地あたりで手配していらしいが、インキキが多いのが評判になったので釜へも進出したのだという。

朝の認定に出てきたらと逢ったとき、その

手配師は今日きてるか——と二人でセンター

内外を歩いてみたが見当らなかった。

まづは御用心、である。

Sはトヤの部屋代を前払いしては飯場へ行くと、帰ってるときならいつでも話を聞かせてもらえるだろう。一杯が二杯——という調子でなくては黙ってるのは確実だがね。

(T6)

金なき仲間達の連続斗争

釜ヶ崎日雇労働組が、暴力飯場中島組へ謝罪と被害者に対する補償を求めて、一週間にわたる連日のようにバスで追っかけて行っていたことは皆も知っているだろう。

四日目だかの夕方に、釜ヶ崎解放会館。

二階にある釜日労事務所での会談。

「おまんけど、三百円貸してくれへんか。毎日バスに乗って行ってるけど金がなくなってきたんや。明日は俺仕事に行く故取りしてきた

から、明日には返す。一晩にいいたやつにメ

ン食わせたいわん。」

「金貸したけどな借金にも金ないわん、それに一人だけに借すわけには、——要いけ

ど今日は炊き出しのメシですましてくれんか。」

一週間を過ぎた日の朝、八時半、会館前。

「兄ちゃん、中島組にはどうぞ、たじろけろわん。毎日バスで行ってたんやけど金がな

くなつたもんで都合した行ってたらバスに乗

り送られたんや。」

バスに乗って行った人達は延で五百人以上になるのではないか。その人達に金を融通したりしてきえた人達を考えると、一体どれくらいの人達が暴力飯場連続斗争に関わったことになるだろうか。

三日目の夜、機動隊員にメガネを投げつけられた人は、「やっぱり、仲間がやられた、聞いたら血が騒ぐけんわ」と語っていた。

金なき仲間達の底力を見せつけた斗争だった。